

長寿医療研究開発費 平成30年度 総括研究報告

在宅介護におけるネガティブアウトカムを呈する介護者の  
迅速な同定法の確立：サポートスキーム構築に向けて（28-28）

主任研究者 荒井 由美子 国立長寿医療研究センター 長寿政策科学研究部 部長

研究要旨（平成28～30年度）

家族介護者にとって介護が負担であると、介護者自身が抑うつ症状や不適切処遇などのネガティブアウトカムを呈し、在宅介護の継続が困難になることが明らかになっている。従って、このようなネガティブアウトカムを呈する可能性のある家族介護者（以下、ハイリスク介護者）を、臨床の現場において迅速に同定することは喫緊の課題である。

本研究では、申請者自身が開発し、わが国の在宅介護者の負担尺度として最も頻用されている Zarit 介護負担尺度日本語版短縮版(J-ZBI\_8)における、不適切処遇に関しての介護負担の閾値を算出した上でハイリスク介護者を迅速に抽出するための同定法を確立することを第一の目的とする。次に、医師、看護師、ケアマネージャーらと協力し、今般、確立した同定法の、もの忘れ外来や在宅介護の現場における実際の運用状況を確認し、ハイリスク介護者に対するサポートスキーム構築に向けての課題を検討することを第二の目的とする。

本研究は、ハイリスク介護者を、もの忘れ外来や在宅介護の現場において迅速に抽出し、迅速かつ適切な介護者支援に寄与できるものと期待される。以て、新オレンジプランにおける「認知症の人の容態だけでなく、家族等の負担の状況をも適切に評価・配慮することが必要である」との記載事項を具現化するものであると期待される。

主任研究者

荒井 由美子 国立長寿医療研究センター 長寿政策科学研究部 部長

分担研究者

大久保 直樹 国立長寿医療研究センター 看護部 副看護師長

橋本 衛 熊本大学大学院 生命科学研究部神経精神医学分野 准教授

梶原 弘平 広島大学大学院 医歯薬保健学研究科 助教

#### A. 研究目的（平成 28～30 年度）

本研究では、申請者自身が開発し、わが国で最も頻用されている Zarit 介護負担尺度日本語版短縮版(J-ZBI\_8)における、不適切処遇に関しての介護負担の閾値を算出した上で、ハイリスク介護者を迅速に抽出するための同定法を確立することを第一の目的とする。次に、医師、看護師、ケアマネージャーらと協力し、今般、確立した同定法の、もの忘れ外来や在宅介護の現場における実際の運用状況を確認し、ハイリスク介護者に対するサポートスキーム構築に向けての課題を検討することを第二の目的とする。

#### B. 研究方法（平成 28～30 年度）

本研究は、ハイリスク介護者を迅速に抽出するための同定法を確立すること、確立した同定法の臨床や在宅介護の現場における実際の運用状況を確認し、ハイリスク介護者に対するサポートスキーム構築に向けての課題を検討することを目的として研究を行うものである。

#### （倫理面への配慮）

本研究の実施にあたっては、分担研究者それぞれの所属組織における倫理委員会の承認を得る。また、対象者に対しては研究の目的等を文書にて説明し、研究協力の受諾の自由、得られたデータの研究目的以外での不使用、データ収集における拒否の自由、研究協力の同意撤回の自由等について説明した上で、同意を得る。対象者のデータは、匿名化し、対象者登録の際から識別番号に変換した上でデータを管理する。また、識別番号と対象者を一致させることができる対応表は、パソコン上では管理せずに、紙媒体のみに記載して研究者の施錠できる棚にて管理する。調査票、収集したデータおよび書類は、研究者の施錠できる棚で管理する。

研究範囲が広範であるため、以下、分担研究ごとに、

A. 研究目的、B. 研究方法、C. 研究結果、D. 考察・結論  
について報告する。

---

## 1. 在宅介護におけるネガティブアウトカムに係る評価法の検討

(主任研究者：荒井 由美子)

### 研究要旨（平成 28～30 年度）

本研究では、主任研究者（荒井由美子）自身が開発し、わが国で最も頻用されている Zarit 介護負担尺度日本語版短縮版(J-ZBI\_8)における、不適切処遇に関しての介護負担の閾値を算出した上で、ハイリスク介護者を迅速に抽出するための同定法を確立するとともに、確立した同定法の運用状況を確認し、ハイリスク介護者に対するサポートスキーム構築に向けての課題を検討することを目的とした。

まず、当センターもの忘れ外来における受診患者の介護者の J-ZBI\_8 得点を算出した。算出した得点が介護に関する抑うつ症状ネガティブアウトカムの閾値（Arai & Zarit, 2014）以上であった場合にはハイリスク介護者であると定義し、もの忘れ外来看護師が、通常外来看護業務に支障がない範囲で、受診当日に「簡便な介護者支援」を行った。なお、「簡便な介護者支援」については、主任研究者が原案を作成・提示したうえで、分担研究者や外来看護師らと複数回の打ち合わせを行い「簡便な介護者支援」の内容を決定した。

### A. 研究目的（平成 28～30 年度）

本研究では、主任研究者（荒井由美子）自身が開発し、わが国で最も頻用されている Zarit 介護負担尺度日本語版短縮版(J-ZBI\_8)における、不適切処遇に関しての介護負担の閾値を算出した上で、ハイリスク介護者を迅速に抽出するための同定法を確立するとともに、確立した同定法の運用状況を確認し、ハイリスク介護者に対するサポートスキーム構築に向けての課題を検討することを目的とした。

### B. 研究方法（平成 28～30 年度）

J-ZBI\_8 に基づいたハイリスク家族介護者同定法およびハイリスク家族介護者に対する簡便な支援の方法について、主任研究者が検討を行い、原案を作成した。看護師らが行う「簡便な介護者支援」については、主任研究者が J-ZBI\_8 得点に基づく簡便な支援法の試案を作成した上で、分担研究者や外来看護師らと複数回の打ち合わせを行い、「簡便な介護者支援」の内容について、「簡便な

介護者支援」の実現可能性について、外来における看護師の動線等も含め検討を行った（検討結果については、結果に記載）。次に、当センターもの忘れ外来看護師が、もの忘れ外来受診患者の介護者に対し、主任研究者が作成した案に則り、ハイリスクの家族介護者に対し簡便な支援を行った。その後、施行前後における J-ZBI\_8 得点等の比較を行った。

（倫理面への配慮）

本研究事業を実施するための倫理審査を受け、承認を得た（受付番号 966）。

#### C. 研究結果（平成 28～30 年度）

もの忘れ外来看護師による「簡便な介護者支援」を了したハイリスク介護者において、施行前後における J-ZBI\_8 得点等の比較を行ったところ、J-ZBI\_8 得点は有意に低下していた。また、J-ZBI\_8 の下位尺度それぞれの得点も、「簡便な介護者支援」の前後で有意に低下していた。

#### D. 考察と結論（平成 28～30 年度）

本研究および主任研究者自身の先行研究により、ハイリスクの家族介護者を迅速に同定する方法を開発することができ、今後、家族介護者に対する迅速な支援に繋げることができるものと考えている。次に、主任研究者が作成した案に則り、ハイリスクの家族介護者に対し簡便な支援を行い、支援施行前後における J-ZBI\_8 得点は有意に低下していたことから、試験的ではあるが、今般考案した簡便な介護者支援を施行することで、家族の介護負担が軽減される可能性が示唆された。

#### E. 健康危険情報

特記すべきことなし

#### 【研究協力者】

水野洋子（国立長寿医療研究センター 長寿政策科学研究部）

---

#### 2. もの忘れ外来における介護者に対するサポートスキームの検討：介護者へのアプローチ方法の検討

（分担研究者：荒井 由美子、大久保 直樹）

#### 研究要旨（平成 28～30 年度）

外来における介護者の負担を把握し、支援の方法を検討すること。主任研究者及び主任研究者の研究協力者と打ち合わせを行い、調査当日の質問票配布、

回収方法、サポート対象の抽出方法や外来における介護者支援の方法を、複数回に亘り検討した。検討した結果を、外来担当看護師及びクラークらに周知し、理解を得た。本研究では、日本語版 Zarit 介護負担尺度短縮版 (J-ZBI\_8) の 8 項目にお答えいただき、合計点を算出することで、在宅で介護を行っている方の介護負担を簡単に把握することとした。外来看護師にとって、外来受診した患者を支援することは大切なことであるが、同時に、患者を介護している家族を支援していくことも重要なことであり、支援にあたっては、まずは、在宅介護による家族の負担を把握することが大切であると考えられた。

#### A. 研究目的 (平成 28～30 年度)

外来患者の家族介護者における介護負担を把握し、介護者に対する支援の方法を検討し、支援を行うことをすることを研究の目的とした。

#### B. 研究方法 (平成 28～30 年度)

主任研究者が検討を行い、J-ZBI\_8 に基づいたハイリスク介護者同定法およびハイリスク介護者に対する簡便な支援の方法について原案を作成した。その原案に基づき、外来での支援について、外来担当看護師と主任研究者が打ち合わせを行い、調査当日の質問票配布、回収方法、サポート対象の抽出方法 (何点以上の方々に支援を行うか) や外来における介護者支援の方法を、複数回に亘り検討した。検討した結果をもとに、主任研究者が、当日の動線についてのまとめ (原案) を作成し、情報の周知・徹底を企図し、最終版を外来に貼付し、外来担当看護師及びクラークらがいつでも参照できるようにした。

(倫理面への配慮)

本研究における調査の実施に際しては、国立長寿医療研究センターの倫理委員会より承認を得た (受付番号 966)。

#### C. 研究結果 (平成 28～30 年度)

本研究では、日本語版 Zarit 介護負担尺度短縮版 (J-ZBI\_8) の 8 項目回答してもらい、合計点を算出することで、在宅で介護を行っている方の介護負担を簡単に把握することとし、その後、介護負担が高い介護者に対し、簡便な支援を行った。その結果、看護師による「簡便な支援」後の J-ZBI\_8 の点数が低下した。

#### D. 考察と結論 (平成 28～30 年度)

「簡便な支援」によって、介護負担感が軽減した可能性があると考えられた。

また、対象者となった介護者が、このような簡便な支援を続けてほしいと願っていることも明らかになった。

#### E. 健康危険情報

特記すべきことなし

---

### 3. 認知症患者介護者の介護負担に対する、専門職による集団心理教育の有用性の検討

(分担研究者：橋本 衛)

#### 研究要旨（平成 28～30 年度）

大学病院通院中のアルツハイマー型認知症患者の家族介護者 4 名と意味性認知症患者の家族介護者 6 名、合計 10 名の介護者に対して、多職種専門職による集団心理教育プログラムを実施した。介護負担感がプログラム実施後に軽減した介護者もいれば、逆にプログラム実施後に介護負担感が増大した介護者もいた。1 年後の評価では、実施直後と比較して介護負担度には変化は見られなかった。1 年間で認知症が進行していることを考慮すれば、多職種専門職による集団心理教育は、意味性認知症のような比較的稀で予後が悪い疾患であっても、一定の効果を示す可能性がある。

#### A. 研究目的（平成 28～30 年度）

認知症者の実臨床において、介護者の不適切な対応により患者の症状が悪化し、その結果介護負担が増大しているケースをしばしば経験する。このような場合、適切な介護方法の教育により介護負担が軽減されることが期待される。そこで本研究では、多職種の認知症専門職による家族介護者への集団心理教育が、大学病院通院中の認知症者の介護者の負担の軽減に有用かどうかを検証した。特に意味性認知症のように頻度が低いため病態理解が難しく、予後が不良な疾患において、専門職による心理教育はより有効性が発揮できるのではないかと考えられる。

#### B. 研究方法（平成 28～30 年度）

対象は、熊本大学附属病院認知症専門外来に通院する、男性アルツハイマー型認知症患者 4 名と、意味性認知症患者 6 名のそれぞれの家族介護者 10 名である。対象者に対して、多職種（認知症専門医、認知症看護認定看護師、精神保健福祉士、臨床心理士、薬剤師）による集団心理教育プログラム全 4～6 回を実

施した。本プログラムの有効性の指標として、家族介護者に対して、CSE-D（抑うつの評価）、J-ZBI（介護負担度の評価）を、プログラム実施前後、さらに実施1年後に実施した。さらにプログラムに対する満足度をCSQ-8Jを用いて評価した。対象者全例に対して研究の目的等を文書にて説明し、書面にて同意を得た。

（倫理面への配慮）対象者全例に対して研究の目的等を文書にて説明し、書面にて同意を得た。

#### C. 研究結果（平成28～30年度）

結果は、プログラムを受講したことに対する満足度は、全ての介護者で高かった。介護負担感に対するプログラムの有効性については、4名の患者で介護負担感がプログラム実施後に軽減したが、逆にプログラム実施後に介護負担感が増大した介護者も数名いた。1年後の評価では、実施直後と比較して介護負担度には変化は見られなかった。

#### D. 考察と結論（平成28～30年度）

1年間で認知症が進行していることを考慮すれば、多職種専門職による集団心理教育は、意味性認知症のような比較的稀で予後が悪い疾患であっても、一定の効果を示す可能性がある。

#### F. 健康危険情報

特記すべきことなし

---

#### 4. 在宅介護の現場におけるサポートスキームの検討：在宅介護専門職の活用に向けて

（分担研究者：梶原 弘平）

#### 研究要旨（平成28～30年度）

認知症高齢者の在宅介護者を対象として、サポートスキームを地域の介護支援専門員と共同して行った。倫理的配慮について、研究者が所属する研究倫理審査委員会で承認を受け実施した。解析の結果、介護認識は、介入前後、介入1ヵ月後の3時点を含めた統計的な有意差は認められなかった。さらに、介護負担感のハイリスク群を同定し、ハイリスク群及びハイリスク群の介護認識の変化量の差異を検討した。介護負担感及び肯定的認識においては、統計的な有意差は認められなかった。しかし、介護継続意思のみでは、ハイリスク群では介

入前と介入直後の変化量でのみ統計的に有意な差が認められた。

#### A. 研究目的（平成 28～30 年度）

本年度の研究目的は、在宅介護者のネガティブアウトカムの同定法とサポートスキームの検討を目的とした。

#### B. 研究方法（平成 28～30 年度）

研究対象者は、共同研究機関を利用している認知症高齢者を在宅で介護している家族介護者で同意を得られたものとした。対象者には、ベースラインの確認後、1 ヶ月後に先行研究で作成された介護負担に基づく介入、その 1 ヶ月後にフォローアップの調査を介護支援専門員が行った。研究の実施に先立ち研究責任者が共同研究機関で、研究協力者の介護支援専門員を対象として、研究概要、具体的な手順及び介入方法についての説明会を実施した。

測定項目は、対象者の概要、認知障害、BPSD、介護負担感、肯定的認識、介護継続意思を測定した。

（倫理面への配慮）

対象者に対しては、共同研究施設の研究協力者を通して研究の趣旨、プライバシーへの配慮、研究参加の自由、参加を辞退しても不利益がない事、研究結果の公表の方法について、口頭および依頼文を提示した。研究への同意は、文書への署名を得た。倫理的配慮について、研究者が所属する研究倫理審査委員会で承認を受け実施した。

#### C. 研究結果（平成 28～30 年度）

研究同意を得た 52 名の中で、研究に最後まで参加した 34 名を分析対象者とした。介護者では女性 28 名であった。認知症高齢者との続柄は、娘 14 名、配偶者 14 名であった。認知症高齢者の概要では、性別は、女性 21 名で、認知症の原因疾患はアルツハイマー型 16 名であった。平均年齢は  $84.8 \pm 5.7$  であった。介入前の時点での対象者の概要と介護認識の関連では、介護負担感とは介護継続意思、肯定的認識は有意な相関が認められた。対象者の介護負担感、肯定的認識及び介護継続意思の介入前後の変化を、Friedman 検定にて検討した。介護負担感では、介入前、介入直後、介入 1 か月後では介入後に得点は低下しているが統計的な有意差は認められなかった。介護の肯定的認識では、介入前、介入直後、介入 1 ヶ月後では介入直後に得点が向上していたが統計的な有意差は認められなかった。介護継続意思では、介入前、介入直後、介入 1 か月後と介入後に得点は向上しているが統計的な有意差は認められなかった。介護負担感

のハイリスク群を同定し、非ハイリスク群の介護認識の変化量の差異を検討した。介護負担感及び肯定的認識においては、統計的な有意差は認められなかった。介護継続意思においては、ハイリスク群では介入前と介入直後の変化量でのみ統計的に有意な差が認められた。

#### D. 考察と結論（平成 28～30 年度）

本研究では、認知症高齢者の在宅介護者を対象として、同定法の検討とサポートスキームの臨床応用可能性を検討するために予備的な介入研究を行った。結果より、本研究の同定法とサポートスキームの効果が認知症高齢者の在宅介護者を対象として、有効な傾向が示唆されていると考える。

#### E. 健康危険情報

特記すべきことなし

---

#### F. 研究発表

##### 1. 論文発表

平成 28 年度

- 1) Mizuno Y, Arai Y. Is society tolerant enough to give the necessary priority to vulnerable adults when they need mobility support? J Am Geriatr Soc 2016; 64(8): 1741-1743.
- 2) Toyoshima Y, Washio M, Horiguchi I, Yamasaki R, Onimaru, M, Nakamura K, Miyabayashi I, Arai Y. Undue concern for others' opinions is related to depression among family caregivers of disabled elderly in southern Japan. IMJ 2016; 23(1): 30-33.
- 3) Ikeda M, Mori E, Iseki E, Katayama S, Higashi Y, Hashimoto M, Miyagishi H, Nakagawa M, Kosaka K. Adequacy of using consensus guidelines for diagnosis of dementia with Lewy bodies in clinical trials for drug development. Dement Geriatr Cogn Disord, 2016; 41:55-67.
- 4) Mamiya Y, Nishio Y, Watanabe H, Yokoi K, Uchiyama M, Baba T, Iizuka O, Kanno S, Kamimura N, Kazui H, Hashimoto M, Ikeda M, Takeshita C, Shimomura T, Mori E. The Pareidolia Test: A Simple Neuropsychological Test Measuring Visual Hallucination-Like Illusions. PLoS One. 2016 12; 11(5): e0154713.
- 5) Sakamoto F, Shiraishi S, Tsuda N, Ogasawara K, Yoshida M, Yuki H, Hashimoto M, Tomiguchi S, Ikeda M, Yamashita Y. 123I-MIBG myocardial

- scintigraphy for the evaluation of Lewy body disease: are delayed images essential? Is visual assessment useful? Br J Radiol. 2016 Jun 10:20160144. [Epub ahead of print]
- 6) Kazui H, Yoshiyama K, Kanemoto H, Suzuki Y, Sato S, Hashimoto M, Ikeda M, Tanaka H, Hatada Y, Matsushita M, Nishio Y, Mori E, Tanimukai S, Komori K, Yoshida T, Shimizu H, Matsumoto T, Mori T, Kashibayashi T, Yokoyama K, Shimomura T, Kabeshita Y, Adachi H, Tanaka T. Differences of Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia in Disease Severity in Four Major Dementias. PLoS One. 2016 11(8):e0161092. doi: 0.1371/journal.pone.0161092.
  - 7) Koyama A, Matsushita M, Hashimoto M, Fujise N, Ishikawa T, Tanaka H, Hatada Y, Miyagawa Y, Hotta M, Ikeda M: Mental health among younger and older caregivers of dementia patients. Psychogeriatrics doi: 10.1111/psyg.12200, 2016.
  - 8) Koyama A, Hashimoto M, Tanaka H, Fujise N, Matsushita M, Miyagawa Y, Hatada Y, Fukuhara R, Hasegawa N, Todani S, Matsukuma K, Kawano M, Ikeda M. Malnutrition in Alzheimer's disease, dementia with Lewy bodies, and frontotemporal lobar degeneration: comparison using serum albumin, total protein, and hemoglobin level. PLoS One 11(6): e0157053. doi:10.1371/journal.pone.0157053.
  - 9) 荒井由美子. Zarit 介護負担尺度日本語版 (J-ZBI) と短縮版 (J-ZBI\_8) の概説および J-ZBI\_8 の新たな利用法. 臨床精神医学 2016 ; 45(5) : 591-596.
  - 10) 荒井由美子, 栗田主一, 池田学, 上村直人. 認知症の最新動向と社会精神医学の貢献. 日本社会精神医学会雑誌 2016 ; 25(1) : 19-32.
  - 11) 橋本 衛. BPSD に対する抗認知症薬の使い方. 精神神経学雑誌 118(6): 436-442, 2016.
  - 12) 橋本 衛. 注意障害. 老年精神医学雑誌 27(suppl.D):37-44, 2016
  - 13) 橋本 衛, 池田 学. 認知症の診断基準. 最新醫學 71(3月増刊号):570-576, 2016.
  - 14) 橋本 衛. レビー小体型認知症の薬物療法. 認知症の最新医療 6(3): 123-127, 2016.
  - 15) 橋本 衛. 常同行動 (同じ行動の繰り返し)、抑うつ、不眠 (睡眠障害)、意欲低下 (アパシー)、拒食・食欲低下. 在宅支援のための認知症 BPSD 対応ハンドブック (服部英幸編集)、ライフ・サイエンス、東京、pp162-184、2016.

- 16) 橋本 衛. Alzheimer 型認知症の病態と薬物療法. 脳神経外科診療プラクティス 8. 脳神経外科医が知っておきたい薬物治療の考え方と実際 (清水宏明編集)、文光堂、東京、pp96-98、2016.
- 17) 橋本 衛. 抗認知症薬. ブレインナーシング 2016 夏季増刊号、脳神経領域で必須のくすり (橋本洋一郎監修)、メディカ出版、大阪、pp90-95、2016
- 18) 梶原弘平、高齢者と弁膜症 特徴と必要な看護ケア、臨床老年看護、23(3)、100-105、2016.

平成 29 年度

- 1) Arai Y, Kamimura N. Reliability and validity of the Japanese version of the caregiver self-efficacy scale around driving cessation of family members suffering from dementia. Psychogeriatrics 2017; 17: 210-211.
- 2) Arai Y, Arai A, Mizuno Y, Kamimura N, Ikeda M. The creation and dissemination of downloadable information on dementia and driving from a social health perspective. Psychogeriatrics 2017; 17: 262-266.
- 3) Arai Y, Noguchi C, Zarit SH. Potentially harmful behavior by caregivers may be predicted by a caregiver burden scale. Int J Geriatr Psychiatry 2017; 32: 582-583.
- 4) Koyama A, Hashimoto M, Tanaka H, Fujise N, Matsushita M, Miyagawa Y, Hatada Y, Fukuhara R, Hasegawa N, Todani S, Matsukuma K, Kawano M, Ikeda M. Mental health among younger and older caregivers of dementia patients. Psychogeriatrics 17 (2), 108-114, 2017.
- 5) Kabeshita Y, Adachi H, Matsushita M, Kanemoto H, Sato S, Suzuki Y, Yoshiyama K, Shimomura T, Yoshida T, Shimizu H, Matsumoto T, Mori T, Kashibayashi T, Tanaka H, Hatada Y, Hashimoto M, Nishio Y, Komori K, Tanaka T, Yokoyama K, Tanimukai S, Ikeda M, Takeda M, Mori E, Kudo T, Kazui H. Sleep disturbances are key symptoms of very early stage Alzheimer disease with behavioral and psychological symptoms: a Japan multi-center cross-sectional study (J-BIRD). International Journal of Geriatric Psychiatry 32 (2), 222-230, 2017.
- 6) Sakamoto F, Shiraishi S, Tsuda N, Hashimoto M, Tomiguchi S, Ikeda M, Yamashita Y. Diagnosis of dementia with Lewy bodies: Can 123I-IMP and 123I-MIBG scintigraphy yield new core features? British Journal of Radiology 2017, 90 (1070), 20160156.
- 7) Matsushita M, Yatabe Y, Koyama A, Ueno Y, Ijichi D, Ikezaki H,

- Hashimoto M, Furukawa N, Ikeda M. Why do people with dementia pretend to know the correct answer? A qualitative study on the behaviour of toritsukuroi to keep up appearances. *Psychogeriatrics* doi: 10.1111/psyg.12253. [Epub ahead of print] (2017).
- 8) Kawagoe T, Matsushita M, Hashimoto M, Ikeda M, Sekiyama K. Face-specific memory deficit and changes of eye scanning patterns in patients of amnesic mild cognitive impairment. *Sci Rep.* 2017 30; 7(1):14344. doi: 10.1038/s41598-017-14585-5.
  - 9) 荒井由美子, 水野洋子. 認知症に罹患した高齢運転者及び、その家族介護者への支援：「認知症高齢者の自動車運転を考える家族介護者のための支援マニュアル©」の概要及び作成の背景となった調査の結果. *老年精神医学雑誌* 2018 ; 29(増刊号 1) : 61-67.
  - 10) 荒井由美子. 認知症高齢者およびその家族介護者への支援：Zarit 介護負担尺度日本語版 (J-ZBI)、短縮版 (J-ZBI\_8) および「認知症高齢者の自動車運転を考える家族介護者のための支援マニュアル©」の作成. *日本社会精神医学会雑誌* 2017 ; 26(4) : 337-345.
  - 11) 水野洋子, 荒井由美子. 認知症罹患運転者：現行法の射程及び求められる支援の方向性. *Modern Physician* 2017 ; 37(2) : 133-137.
  - 12) 丸山貴史、橋本 衛、石川智久、福原竜治、田中 響、畑田 裕、小嶋誠志郎、池田 学. 認知症医療と介護連携のための縦断的連携パスの有用性の検証. *Dementia Japan* 31(3): 380-388, 2017.
  - 13) 橋本 衛. 災害時の認知症患者の行動－熊本地震を通して－. *日本社会精神医学会雑誌* 26(4): 346-352, 2017.
  - 14) 橋本 衛. 認知症の注意障害. *Clinical Neuroscience 別冊* 35(8): 992-996, 2017.
  - 15) 本田和揮、橋本 衛. 前頭側頭葉変性症のリスクファクター. *老年精神医学雑誌* 28(7):721-729, 2017.
  - 16) 堀田 牧、田平隆行、石川智久、橋本 衛. アルツハイマー病患者の ADL 障害. *老年精神医学雑誌* 28(9): 984-988, 2017.
  - 17) 吉浦和宏、橋本 衛. 血管性認知症と ADL. *老年精神医学雑誌* 28(9): 997-1003, 2017.
  - 18) 橋本 衛. レビー小体型認知症の診断と治療. *精神科治療学増刊号* 32: 227-232, 2017.
  - 19) 橋本 衛. アルツハイマー病による認知症/軽度認知障害. 別冊日本臨牀. *精神医学症候群 (第 2 版) III－物質関連障害および嗜癖性障害群からてんかんまで－*、日本臨牀社、東京、pp162-168, 2017.

- 20) 山中真、梶原弘平、能登裕子：転倒時における予防動作から見た転倒防  
御姿勢分類. *インターナショナル Nursing Care Research*、  
2017;16(1):1-8.

平成 30 年度

- 1) Arai Y, Kajiwara K, Toba K, et al : A prompt and practical on-site support programme for family caregivers of persons with dementia: a preliminary uncontrolled interventional study. *Psychogeriatrics*. 18(6),476-478, 2018.
- 2) Miyabayashi I, Washio M, Toyoshima Y, Ogino H, Hata T, Horiguchi I, Arai Y. Factors related to heavy burden among Japanese family caregivers of disabled elderly with home-visiting nursing services under the public long-term care insurance system. *IMJ* 2018; 25(3): 167-170.
- 3) Tsunoda N, Hashimoto M, Ishikawa T, Fukuhara R, Yuki S, Tanaka T, Hatada Y, Miyagawa Y, Ikeda M. Clinical features of auditory hallucinations in patients with DLB: A soundtrack of visual hallucinations. *J Clin Psychiatry* 2018 May/Jun;79(3). pii: 17m11623. doi: 10.4088/JCP.17m11623.
- 4) Fukuda K, Terada S, Hashimoto M, Ukai K, Kumagai R, Suzuki M, Nagaya M, Yoshida M, Hattori H, Murotani K, Toba K. Effectiveness of educational program using printed educational material on care burden distress among staff of residential aged care facilities without medical specialists and/or registered nurses: Cluster quasi-randomization study. *Geriatr Gerontol Int*. 2018 18(3), 487-494. doi: 10.1111/ggi.13207.
- 5) Koyama A, Hashimoto M, Fukuhara R, Ichimi N, Takasaki A, Matsushita M, Ishikawa T, Tanaka H, Miyagawa Y, Ikeda M. Caregiver burden in semantic dementia with right- and left-sided predominant cerebral atrophy and in behavioral variant frontotemporal dementia. *Dementia and Cognitive Disorders EXTRA* 8(1):128-137, 2018 doi: 10.1159/000487851.
- 6) Tateishi M, Kitajima M, Hirai T, Yoneda T, Hashimoto M, Kurehana N, Uetani H, Fukuhara R, Azuma M, Yamashita Y. Differentiating between Alzheimer Disease Patients and Controls with Phase-difference-enhanced Imaging at 3T: A Feasibility Study. *Magn Reson Med Sci*. 17 (4), 283-292, 2018 doi: 10.2463/mrms.mp.2017-0134.
- 7) Matsushita M, Yatabe Y, Koyama A, Katsuya A, Ijichi D, Miyagawa Y, Ikezaki H, Furukawa N, Ikeda M, Hashimoto M. Are saving appearance

- responses typical communication patterns in Alzheimer's disease? PLoS One. 2018 May 23;13(5):e0197468. doi: 10.1371/journal.pone.0197468. eCollection 2018.
- 8) Kajiwara K, Noto H, Yamanaka M. Positive Appraisal Reduces Caregiver Burden Among In-Home Family Caregivers of Persons with Dementia in Japan. *International Nursing Care Research*, 17(1), 31-36, 2018.
  - 9) Kajiwara K, Noto H, Yamanaka M. Changes in caregiving appraisal among family caregivers of persons with dementia: A longitudinal study over 12 months. *Psychogeriatrics*, 18(6), 460-467, 2018.
  - 10) Kajiwara K, Mantani A, Noto H, et al. The relationship between caregiver burden and caregiver pulse rate measured using a wristwatch-type pulsimeter with accelerometer in home-based family caregivers for persons with dementia: Pilot study. *Psychogeriatrics*, 19(1), 83-84, 2018.
  - 11) 荒井由美子, 水野洋子. 認知症に罹患した高齢運転者及び、その家族介護者への支援:「認知症高齢者の自動車運転を考える家族介護者のための支援マニュアル©」の概要及び作成の背景となった調査の結果. *老年精神医学雑誌* 2018 ; 29(増刊号 1) : 61-67.
  - 12) 荒井由美子. Zarit 介護負担尺度日本語版 (J-ZBI) および短縮版 (J-ZBI\_8). *日本医師会雑誌* 2018 ; 147 (特別号 2 認知症トータルケア) : S193-S194.
  - 13) 橋本 衛. 認知症と高次脳機能. *JOHNS* (34)3: 355-358, 2018.
  - 14) 菅原 裕子, 橋本 衛, 岩本 和也. 精神疾患のジェネティクス うつ病. *Clinical Neuroscience* 36(2): 249-252, 2018.
  - 15) 今井 正城, 橋本 衛. うつ病とレビー小体型認知症. *老年精神医学雑誌* 29(3): 267-273, 2018.
  - 16) 高崎昭博, 橋本 衛. 認知症の認知機能検査について. *老年精神医学雑誌* 29(9): 907-914, 2018.
  - 17) 橋本 衛. 認知症診療の基本. *精神科治療学* 33: 1153-1159, 2018.
  - 18) 橋本 衛. レビー小体型認知症の患者の夫から、「私が浮気をしていると言って妻に責められる」と相談がありました。どうしたら良いでしょうか?. *精神科治療学* 33 (増刊号) : 154-155, 2018.
  - 19) 梶原弘平, 荒井由美子, 津留英智, 坂崎剛, 吉村満希: 認知症高齢者の家族介護者の介護負担感に着目した簡便な支援とその効果、*日本認知症ケア学会誌*, 17(4)、718-725、2019.

## 2. 学会発表

平成 28 年度

- 1) Hashimoto M, Fukuhara R, Kaneda K, Koyama A, Ikeda M. Depression symptoms in patients with frontotemporal lobar degeneration. 10th International Conference on Frontotemporal Dementias, Munich German, August 31-September 2, 2016
- 2) Hashimoto M. Assessment and diagnosis of BPSD. Asia Dementia Forum., Tokyo, November 20, 2016
- 3) 荒井由美子. (シンポジウム). 家族介護者の介護負担把握と介護者支援マニュアルの作成. 第 36 回日本社会精神医学会, 2017 年 3 月 3 日, 東京都.
- 4) 荒井由美子. (特別講演). 認知症と自動車運転: 当事者および家族支援の観点から. 第 1 回自動車運転に関する合同研究会. 2017 年 1 月 21 日, 北九州市.
- 5) 荒井由美子. (基調講演). 認知症高齢者の自動車運転: 認知症高齢者の安全と安心のために. 毎日新聞社主催シンポジウム第 2 回認知症 800 万人時代: 認知症の人とその家族をどう守るか? 2016 年 7 月 10 日, 大阪市.
- 6) 水野洋子, 荒井由美子. 要支援者の家族が有する介護等に係る消極的見解及び求める支援の検討. 第 75 回日本公衆衛生学会, 2016 年 10 月 26-28 日 (発表 27 日), 大阪市.
- 7) 水野洋子, 荒井由美子. 認知症高齢者の自動車運転についての家族の対応に係る検討. 第 31 回日本老年精神医学会, 2016 年 6 月 23-24 日 (発表 23 日), 金沢市.
- 8) 水野洋子, 荒井由美子. 介護サービスを利用していない要支援者の非同居家族が有する介護に関する見解の検討. 第 58 回日本老年社会科学会大会, 2016 年 6 月 11-12 日 (発表 11 日), 松山市.
- 9) 鷲尾昌一, 豊島泰子, 荒井由美子. 要介護高齢者の家族介護者の主観的健康度に影響を与える要因. 第 17 回日本健康支援学会年次学術大会, 2016 年 2 月 27-28 日, 名古屋市.
- 10) 橋本 衛. 「抗認知症薬の BPSD への適用」. 第 112 回日本精神神経学会学術総会 シンポジウム, 2016 年 6 月 3 日, 千葉市.
- 11) 橋本 衛. 「高次脳機能障害の診察の進め方」. 第 112 回日本精神神経学会学術総会 教育講演, 2016 年 6 月 3 日, 千葉市.
- 12) 橋本 衛. 「前頭側頭葉変性症 (FTLD) と抑うつ」. 第 31 回日本老年精

- 神医学会 シンポジウム、金沢市、金沢歌劇座、6月23-24日、2016.
- 13) 橋本 衛. 「抗認知症薬の BPSD への適用」. 第 35 回日本認知症学会学術集会、シンポジウム、東京都千代田区、東京国際フォーラム、12月1-3日、2016.
  - 14) 橋本 衛. 「災害時の認知症患者の行動ー熊本地震を通してー」. 第 36 回日本社会精神医学会、シンポジウム、東京都大田区、大田区産業プラザ、3月3-4日、2017.
  - 15) 梶原弘平、能登裕子、山中真、中尾久子、認知症高齢者の在宅介護者の介護継続意思に影響する要因の検討、第 21 回日本老年看護学会学術集会、埼玉県、2016.

平成 29 年度

- 1) Arai Y. The Long-Term Care insurance in Japan: the past and the present (plenary lecture). The annual conference of Korean Dementia Association (KDA), 2017 November 4-5 (Presentation: November 4), Seoul, Korea.
- 2) Noto H, Muraki S, Kajiwara K. The relations among physical sensations, body functions, and fall history elderly living at home, The 2nd Asian Conference on Ergonomics and Design, 2017 June 3, Japan.
- 3) 荒井由美子. 認知症と自動車運転: 当事者および家族支援の観点から. 第 1 回自動車運転に関する合同研究会(特別講演), 2017年1月21日, 北九州市.
- 4) 荒井由美子. 家族介護者の介護負担把握と介護者支援マニュアルの作成 (シンポジウム). 第 36 回日本社会精神医学会, 2017年3月3日, 東京.
- 5) 荒井由美子. 認知症と自動車運転: ご本人と家族介護者への支援 (プレナリー). アルツハイマー病研究会 プレナリーセッション 2, 2017年4月22日, 東京
- 6) 荒井由美子, Zarit SH. 家族介護者の不適切処遇に関する短縮版 Zarit 介護負担尺度日本語版得点からの予測: 大規模データを用いて. 第 32 回日本老年精神医学会, 2017年6月14日-16日 (発表16日), 名古屋市.
- 7) 水野洋子, 荒井由美子. 認知症 (の疑いのある) 者の自動車運転に係る介護支援専門員への相談内容及び中止経緯. 第 32 回日本老年精神医

- 学会, 2017年6月14-16日(発表15日), 名古屋市.
- 8) 水野洋子, 荒井由美子. 自動車運転の中止に向き合う認知症高齢者への支援の検討: 介護支援専門員が必要と考える支援の内容に着目して. 第59回日本老年社会学会大会, 2017年6月14-16日(発表15日), 名古屋市.
  - 9) 中部貴央, 上松弘典, 佐々木典子, 國澤進, 荒井由美子, 今中雄一. 認知症介護における小規模多機能型居宅介護の利用と介護負担. 第55回日本医療・病院管理学会学術総会, 2017年9月17-18日(発表18日), 東京都.
  - 10) 中部貴央, 佐々木典子, 荒井由美子, 今中雄一. 認知症介護におけるインフォーマルケアと介護負担感との関係. 第76回日本公衆衛生学会総会, 2017年10月31日-11月2日(発表10月31日), 鹿児島市.
  - 11) 橋本 衛. 「災害時の認知症患者の行動ー熊本地震を通してー」. 第36回日本社会精神医学会、シンポジウム、東京都大田区、大田区産業プラザ、3月3-4日、2017.
  - 12) 橋本 衛. 「アルツハイマー病と特発性正常圧水頭症の合併に関する検討」. 第23回熊本脳機能画像研究会、熊本市、山崎記念会館、5月17日、2017.
  - 13) 橋本 衛. パネルディスカッション「認知症の診断と治療」. Dementia Academy in CNS Academy 2017、東京都千代田区、東京国際フォーラム、7月8-9日、2017.
  - 14) 橋本 衛. 「認知症における妄想の神経基盤と治療」. 第39回生物学的精神医学会、シンポジウム、札幌市、札幌コンベンションセンター、9月28-30日、2017.
  - 15) 橋本 衛. 「レビー小体型認知症の治療ー認知機能障害、BPSDを中心にー」. 第11回レビー小体型認知症研究会、シンポジウム、横浜市、新横浜プリンスホテル、11月4日、2017.
  - 16) 橋本 衛. 「軽度認知障害と森田療法」. 第35回日本森田療法学会、シンポジウム、熊本市、熊本大学工学部百周年記念会館、11月11-12日、2017.
  - 17) 橋本 衛. 「地域における認知症診療体制」. 第36回日本認知症学会学術集会、シンポジウム、石川県金沢市、石川県立音楽堂、11月24-26日、2017.
  - 18) 橋本 衛. 「認知症患者の妄想の発現に関わる要因について」. 第36回日本認知症学会学術集会、シンポジウム、石川県金沢市、石川県立音楽堂、11月24-26日、2017.

## 平成 30 年度

- 1) 中部貴央, 佐々木典子, 荒井由美子, 今中雄一. 認知症のケアにおける介護離職・介護休業と抑うつ度との関連. 第 77 回日本公衆衛生学会総会, 2018 年 10 月 24 日-26 日 (発表 25 日), 福島県郡山市.
- 2) 水野洋子, 荒井由美子. 運転免許の取得履歴を有さない独居要支援者の外出・移動に関する検討. 第 33 回日本老年精神医学会, 2018 年 6 月 29 日-30 日 (発表 30 日), 福島県郡山市.
- 3) 橋本 衛. 「若年性認知症と注意欠如多動性障害」. 第 33 回日本老年精神医学会、福島県福島、ビッグパレットふくしま、6 月 29-30 日、2018.
- 4) 橋本 衛. 「DLB の精神症状が認知機能変動に及ぼす影響について」. 第 23 回日本神経精神医学会学術集会、島根県松江市、松江テルサ、10 月 6-7 日、2018.
- 5) 橋本 衛. 「BPSD に対する非薬物療法」. 第 37 回日本認知症学会学術集会、札幌市、ロイトン札幌、10 月 12-14 日、2018.
- 6) 橋本 衛. 「認知症医療の現状と今後～熊本認知症ネットワーク」. 認知症診療フロンティア～認知症の人にやさしい地域づくりを目指して～、東京都、グランドプリンスホテル新高輪、11 月 10 日、2018.
- 7) 梶原弘平、荒井由美子、津留英智、他:認知症高齢者のハイリスクの家族介護者に対する簡便な支援方法の検討、日本老年看護学会第 23 回学術集会、福岡県、2018.
- 8) 行友玲子、河本有花、梶原弘平、他:急性期病院における外科系疾患の高齢患者の入院の現状、日本老年看護学会第 23 回学術集会、福岡県、2018.

## G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得、2. 実用新案登録、3. その他  
特記すべきことなし

長寿医療研究開発費 平成30年度 総括研究報告  
(年度報告)

在宅介護におけるネガティブアウトカムを呈する介護者の  
迅速な同定法の確立：サポートスキーム構築に向けて（28-28）

主任研究者 荒井 由美子 国立長寿医療研究センター 長寿政策科学研究部 部長

研究要旨（平成30年度）

本年度の各分担研究に係る概要は、以下の通りである。

分担研究1（荒井）では、当センターもの忘れ外来受診者の介護者に対する「簡便な介護者支援」施行前後におけるJ-ZBI\_8得点等の比較を行ったところ、J-ZBI\_8得点は有意に低下していた。このことから、試験的ではあるが、今般考案した簡便な介護者支援を施行することで、家族の介護負担が軽減される可能性が示唆された(Arai, et al, Psychogeriatrics, 18(6),476-478, 2018.)。

分担研究2（荒井、大久保）では、主たる介護者への自身にも持病がある事例を検討したが、「簡便な支援」を実施した結果、J-ZBI\_8の点数が半減したことから、当該「簡便な支援」により、介護負担感が軽減した可能性があることが考えられた。

分担研究3（橋本）では、多職種認知症専門職による家族介護者への集団心理教育の、長期的な有効性を検証した。結果は、心理教育実施直後と比較して1年後の介護負担には変化は見られなかった。1年間で認知症が進行していることを考慮すれば、多職種専門職による集団心理教育は、意味性認知症のような比較的稀で予後が悪い疾患であっても、一定の効果を示す可能性がある。

分担研究4（梶原）では、認知症高齢者の在宅介護者を対象として、サポートスキームを地域の介護支援専門員と共同して行った。倫理的配慮について、研究者が所属する研究倫理審査委員会で承認を受け実施した。解析の結果、介入前後の2時点の比較では、介護負担感、肯定的認識、介護継続意思は改善傾向であったが介入1ヵ月後の3時点を含めた統計的な有意差は認められなかった。

主任研究者

荒井 由美子 国立長寿医療研究センター 長寿政策科学研究部 部長

分担研究者

大久保 直樹 国立長寿医療研究センター 看護部 副看護師長

橋本 衛 熊本大学大学院 生命科学研究部神経精神医学分野 准教授

梶原 弘平 広島大学大学院 医歯薬保健学研究科 助教

研究範囲が広範であるため、以下、分担研究ごとに、

A. 研究目的、B. 研究方法、C. 研究結果、D. 考察・結論  
について報告する。

---

## 1. 在宅介護におけるネガティブアウトカムに係る評価法の検討

(主任研究者：荒井 由美子)

### A. 研究目的（平成 30 年度）

本研究では、主任研究者（荒井由美子）自身が開発し、わが国で最も頻用されている Zarit 介護負担尺度日本語版短縮版(J-ZBI\_8)における、不適切処遇に関する介護負担の閾値を算出した上で、ハイリスク介護者を迅速に抽出するための同定法を確立するとともに、確立した同定法の運用状況を確認し、ハイリスク介護者に対するサポートスキーム構築に向けての課題を検討することを目的とした。

### B. 研究方法（平成 30 年度）

当センターもの忘れ外来受診者の介護者に対する「簡便な介護者支援」施行前後における J-ZBI\_8 得点等の比較を行った。

(倫理面への配慮)

本研究事業を実施するための倫理審査を受け、承認を得た（受付番号 966）。

### C. 研究結果（平成 30 年度）

「簡便な介護者支援」を了したハイリスク介護者において、施行前後における J-ZBI\_8 得点等の比較を行ったところ、J-ZBI\_8 得点は有意に低下していた。また、J-ZBI\_8 の下位尺度それぞれの得点も、「簡便な介護者支援」の前後で有意に低下していた。

### D. 考察と結論（平成 30 年度）

簡便な支援施行前後における J-ZBI\_8 得点等の比較を行ったところ、J-ZBI\_8 得点は有意に低下していた。このことから、試験的ではあるが、今般考案した簡便な介護者支援を施行することで、家族の介護負担が軽減される可能性が示唆された。

## E. 健康危険情報

特記すべきことなし

### 【研究協力者】

水野洋子（国立長寿医療研究センター 長寿政策科学研究部）

---

## 2. もの忘れ外来における介護者に対するサポートスキームの検討：介護者へのアプローチ方法の検討

（分担研究者：荒井 由美子、大久保 直樹）

### A. 研究目的（平成 30 年度）

外来患者の家族介護者における介護負担を把握し、介護者に対する支援の方法を検討し、支援を行うことをすることを研究の目的とした。

### B. 研究方法（平成 30 年度）

外来における介護者支援の方法を検討し、主任研究者が開発した「簡便な支援」を行い、支援を実施した事例について検討した。

### C. 研究結果（平成 30 年度）

外来における介護者支援の方法を検討し、主任研究者が開発した「簡便な支援」を行い、以下の事例について検討した。

【年齢】80代 【性別】男性 【診断名】DLB

【主たる介護者】：妻 【要介護】要介護度1

短縮版 Zarit 介護負担尺度日本語版（以下、J-ZBI\_8）（荒井ら、2003）の得点が20点であり、抑うつ症状の閾値を超えていたため、今般の「外来における簡便な支援」の該当者であると判断した。そこで、看護師が主たる介護者である妻と面談し、「簡便な支援」を実施した。その結果、J-ZBI\_8の点数が20点から10点へと半減した

### D. 考察と結論（平成 30 年度）

主たる介護者である妻自身にも持病があり、近隣に在住している娘とともに本人の診察に付き添っていた。「簡便な支援」の結果、J-ZBI\_8の点数が半減したことから、今回の「簡便な支援」によって、介護負担感が軽減した可能性があると考えられた。

E. 健康危険情報

特記すべきことなし

---

3. 認知症患者介護者の介護負担に対する、専門職による集団心理教育の有用性の検討

(分担研究者：橋本 衛)

A. 研究目的（平成 30 年度）

多職種認知症専門職による家族介護者への集団心理教育の、長期的な有効性を検証した。

B. 研究方法（平成 30 年度）

平成 29 年度に集団心理教育プログラムを実施した意味性認知症患者家族に対して、プログラムの長期効果を検証するために、CSE-D、J-ZBI を 1 年後に再検した。

C. 研究結果（平成 30 年度）

SD 患者の家族介護者 5 例に対して、集団プログラムの実施 1 年後に CES-D と J-ZBI を再評価した。介護者の抑うつについては、1 年後に増大している家族が 3 例いたが、介護負担については、明らかな変化は見られなかった。

D. 考察と結論（平成 30 年度）

本プログラムでは、介護者がプログラムで学んだ知識や技術を実際の介護の中で実践し、その効果を実感して初めて介護負担が減少することを想定している。したがって、本プログラムの効果が介護負担の軽減として現れるためには、より長期にわたる介護の実践が必要であり、プログラム実施前後の 2 ヶ月という短期間では、十分にその効果を実感できていない可能性が考えられたため、今回 1 年後の評価を実施した。結果は、介護負担については実施直後と比較して明らかな変化は見られなかったが、意味性認知症は進行性の疾患であり、1 年間で認知症が進行していることを考慮すれば、多職種専門職による集団心理教育は、意味性認知症のような比較的稀で予後が悪い疾患であっても、一定の効果を示す可能性がある。

F. 健康危険情報

特記すべきことなし

---

#### 4. 在宅介護の現場におけるサポートスキームの検討：在宅介護専門職の活用に向けて

(分担研究者：梶原 弘平)

##### A. 研究目的（平成 30 年度）

在宅介護者のネガティブアウトカムの同定法とサポートスキームの検討を目的とした。

##### B. 研究方法（平成 30 年度）

前年度からのサポートスキームの調査・分析を引き続き行った。その後に、収集した対象者の分析結果を行踏まえて、共同研究者、看護学分野大学教員、介護支援専門員の各種専門職とサポートスキームの今後の臨床応用を含めた検討を行った。

(倫理面への配慮)

倫理的配慮について、研究者が所属する研究倫理審査委員会で承認を受け実施した。

##### C. 研究結果（平成 30 年度）

前年度の調査に引き続き、介入 1 ヶ月後の調査を行った。対象者の介護負担感では介入 1 か月後は  $12.9 \pm 8.4$  と介入後に得点は低下傾向であった。介護の肯定的認識では、介入 1 ヶ月後では  $16.6 \pm 4.6$  であり値に変化が認められない傾向であった。介護継続意思では、介入 1 か月後は値に変化が認められない傾向であった。

##### D. 考察と結論（平成 30 年度）

本研究では、簡便な支援方法の継続効果を検討した。しかし、介入直後の介護認識には改善傾向が示されたが、介入 1 ヶ月後の時点での継続効果は示されなかった。このことは、簡便な声かけは短期間の効果しか持続しない可能性が示唆された。このことを踏まえて介護負担感の支援方法の検討と継続的に効果の期待できる手法を更に検討する必要性がある。

##### E. 健康危険情報

特記すべきことなし

---

## F. 研究発表

### 1. 論文発表

- 1) Arai Y, Kajiwara K, Toba K, et al : A prompt and practical on-site support programme for family caregivers of persons with dementia: a preliminary uncontrolled interventional study. *Psychogeriatrics*. 18(6),476-478, 2018.
- 2) Miyabayashi I, Washio M, Toyoshima Y, Ogino H, Hata T, Horiguchi I, Arai Y. Factors related to heavy burden among Japanese family caregivers of disabled elderly with home-visiting nursing services under the public long-term care insurance system. *IMJ* 2018; 25(3): 167-170.
- 3) Tsunoda N, Hashimoto M, Ishikawa T, Fukuhara R, Yuki S, Tanaka T, Hatada Y, Miyagawa Y, Ikeda M. Clinical features of auditory hallucinations in patients with DLB: A soundtrack of visual hallucinations. *J Clin Psychiatry* 2018 May/Jun;79(3). pii: 17m11623. doi: 10.4088/JCP.17m11623
- 4) Fukuda K, Terada S, Hashimoto M, Ukai K, Kumagai R, Suzuki M, Nagaya M, Yoshida M, Hattori H, Murotani K, Toba K. Effectiveness of educational program using printed educational material on care burden distress among staff of residential aged care facilities without medical specialists and/or registered nurses: Cluster quasi-randomization study. *Geriatr Gerontol Int*. 2018 18(3), 487-494. doi: 10.1111/ggi.13207.
- 5) Koyama A, Hashimoto M, Fukuhara R, Ichimi N, Takasaki A, Matsushita M, Ishikawa T, Tanaka H, Miyagawa Y, Ikeda M. Caregiver burden in semantic dementia with right- and left-sided predominant cerebral atrophy and in behavioral variant frontotemporal dementia. *Dementia and Cognitive Disorders EXTRA* 8(1):128-137, 2018 doi: 10.1159/000487851
- 6) Tateishi M, Kitajima M, Hirai T, Yoneda T, Hashimoto M, Kurehana N, Uetani H, Fukuhara R, Azuma M, Yamashita Y. Differentiating between Alzheimer Disease Patients and Controls with Phase-difference-enhanced Imaging at 3T: A Feasibility Study. *Magn Reson Med Sci*. 17 (4), 283-292, 2018 doi: 10.2463/mrms.mp.2017-0134.
- 7) Matsushita M, Yatabe Y, Koyama A, Katsuya A, Ijichi D, Miyagawa

- Y, Ikezaki H, Furukawa N, Ikeda M, Hashimoto M. Are saving appearance responses typical communication patterns in Alzheimer's disease? PLoS One. 2018 May 23;13(5):e0197468. doi: 10.1371/journal.pone.0197468. eCollection 2018.
- 8) Kajiwara K, Noto H, Yamanaka M. Positive Appraisal Reduces Caregiver Burden Among In-Home Family Caregivers of Persons with Dementia in Japan. International Nursing Care Research, 17(1), 31-36, 2018.
- 9) Kajiwara K, Noto H, Yamanaka M. Changes in caregiving appraisal among family caregivers of persons with dementia: A longitudinal study over 12 months. Psychogeriatrics, 18(6), 460-467, 2018.
- 10) Kajiwara K, Mantani A, Noto H, et al. The relationship between caregiver burden and caregiver pulse rate measured using a wristwatch-type pulsimeter with accelerometer in home-based family caregivers for persons with dementia: Pilot study. Psychogeriatrics, 19(1), 83-84, 2018.
- 11) 荒井由美子, 水野洋子. 認知症に罹患した高齢運転者及び、その家族介護者への支援:「認知症高齢者の自動車運転を考える家族介護者のための支援マニュアル©」の概要及び作成の背景となった調査の結果. 老年精神医学雑誌 2018 ; 29(増刊号 1) : 61-67.
- 12) 荒井由美子. Zarit 介護負担尺度日本語版 (J-ZBI) および短縮版 (J-ZBI\_8). 日本医師会雑誌 2018 ; 147 (特別号 2 認知症トータルケア) : S193-S194.
- 13) 橋本 衛. 認知症と高次脳機能. JOHNS (34)3: 355-358, 2018
- 14) 菅原 裕子, 橋本 衛, 岩本 和也. 精神疾患のジェネティクス うつ病. Clinical Neuroscience 36(2): 249-252, 2018
- 15) 今井 正城, 橋本 衛. うつ病とレビー小体型認知症. 老年精神医学雑誌 29(3): 267-273, 2018
- 16) 高崎昭博, 橋本 衛. 認知症の認知機能検査について. 老年精神医学雑誌 29(9): 907-914, 2018
- 17) 橋本 衛. 認知症診療の基本. 精神科治療学 33: 1153-1159, 2018
- 18) 橋本 衛. レビー小体型認知症の患者の夫から、「私が浮気をしていると言って妻に責められる」と相談がありました。どうしたら良いでしょうか?. 精神科治療学 33 (増刊号) : 154-155, 2018
- 19) 梶原弘平, 荒井由美子, 津留英智, 坂崎剛, 吉村満希 : 認知症高齢者の家族介護者の介護負担感に着目した簡便な支援とその効果、日本認

知症ケア学会誌、17(4)、718-725、2019.

## 2. 学会発表

- 1) 中部貴央, 佐々木典子, 荒井由美子, 今中雄一. 認知症のケアにおける介護離職・介護休業と抑うつ度との関連. 第77回日本公衆衛生学会総会, 2018年10月24日-26日(発表25日), 福島県郡山市.
- 2) 水野洋子, 荒井由美子. 運転免許の取得履歴を有さない独居要支援者の外出・移動に関する検討. 第33回日本老年精神医学会, 2018年6月29日-30日(発表30日), 福島県郡山市.
- 3) 橋本 衛. 「若年性認知症と注意欠如多動性障害」. 第33回日本老年精神医学会、福島県福島、ビッグパレットふくしま、6月29-30日、2018
- 4) 橋本 衛. 「DLB の精神症状が認知機能変動に及ぼす影響について」. 第23回日本神経精神医学会学術集会、島根県松江市、松江テルサ、10月6-7日、2018
- 5) 橋本 衛. 「BPSD に対する非薬物療法」. 第37回日本認知症学会学術集会、札幌市、ロイトン札幌、10月12-14日、2018
- 6) 橋本 衛. 「認知症医療の現状と今後～熊本認知症ネットワーク」. 認知症診療フロンティア～認知症の人にやさしい地域づくりを目指して～、東京都、グランドプリンスホテル新高輪、11月10日、2018
- 7) 梶原弘平、荒井由美子、津留英智、他:認知症高齢者のハイリスクの家族介護者に対する簡便な支援方法の検討、日本老年看護学会第23回学術集会、福岡県、2018.
- 8) 行友玲子、河本有花、梶原弘平、他:急性期病院における外科系疾患の高齢患者の入院の現状、日本老年看護学会第23回学術集会、福岡県、2018.

## G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得、2. 実用新案登録、3. その他  
特記すべきことなし